夕刊
磐城新聞
九月二十日發行
定價 一ヶ月 一部 金五錢 金六十錢（郵税拾五錢）
廣告料 普通欄 金六拾錢 特別欄 金九拾錢（五號十二字詰一行一回）
編輯印刷兼發行人 柏木 [illegible]
福島縣石城郡平町十六番地
發行所 磐城新聞 合資會社
振替 [illegible]（タイライワキ） 電話五六四番
（日曜祭日翌日休刊）
東京振替一〇六五五八五番

# 子規と松山藩（一）

園田生

子規の歿後久しき歳月の推移にともなひ、次第に當時の知人も凋落して行つて遂には虚實を誤らす樣な話が後世に傳はり、此の人の眞骨頂を描き得ない事になりはしないかと恐れる者あるが、幸に句誌『鶏頭』の柳原極堂氏がもつて、熱心に忠實に子の眞生活を捉へんと多年苦心してをられるのに意を強うする事と思ふ。昔松山の小學校に於いて子規と同年であり同級であつた者で、今生殘つてをる友人は私の外多くても一人位であらう。その時分に成績によつて生徒をグングン上級に上らせたので、三四才年齡の差があつた。碧梧桐子の姉で多分校中第一の美少女なりし河東おのぶさんも同級であつたが、この人に子規・筆者を加へた三人の外、級中に最年少の者とては餘り居なかつた。子規は私を直さんと呼び、私は彼をノボさんと呼んでをつた。話はすこし橫道へはいるが、且て恩師浮田先生が新島襄傳を書かれると聞いたので、今度こそは本當のものが出來ると喜んで、同志社時報に、私の喜びと希望を掲げた事があつた。今迄の傳記はみな基督的紳士としての先生を描いたもので、思はしくない。先生を分析すれば、基督的四分武士氣質四分、上州の長脇差氣質二分位の合成物である。其の積りで書かねばいくら新島傳が出ても完全ではなからうと言ふた事がある。子規子にしても多少松山藩の傳統的氣風を飲み込まねば本當の子規子は解らないと思ふ。そして彼を描くに當り、孤山の樣に凡てから切り離して、唯子規人を描かんとするの[illegible]であらうか。

松山藩祖定行公は東照宮の異父弟であつて豪邁なる俊傑であつたが、加藤嘉明移封の後をうけて松山十五萬石の松平家となられた。赤穗藩が製鹽によりて、非常に藩の財政を豐富にしたが、松山藩の大鹽田は波止濱である。今治市の西一里餘の處にある此の大財源が明治の廢藩時代に至る迄、徳川幕府には無屆のものであつたと聞いてゐる。此の鹽田は私の九代前の先祖の同地方の代官であつた時築造したもので、後々多少増築したが、開拓者の緣故によつて、子供の時より、種々耳にして居た處のこの鹽田が、藩の内所倉であつたと云ふ事は、おそらく事實であらう。此故のみではないが、藩士は比較的生活に餘裕があつた。そして氣は潜み景の務で國士に仕んで、人の心をおのづから豐かに、思索や詩作の榮えるのも偶然[illegible]なかつた

（つゞく）

〇

うつそみを掩ひしづもる霧の中に何の鳥ぞも聲立てゝ鳴く　長塚節

9月21日

△石田三成捕へらる（慶長五）△近畿地方大暴風雨（昭和九）△地方選擧の先頭鳥取縣の投票行はる（同一〇）

贈高木小名濱助役

珠雲　小野務平

多年勤節合名馳
蹇々匪躬治績滋
機密遭逢豈無日
待他龍蟄踏騰時

## 天氣豫報

小名濱測候所觀測

今晩は北の風雨後曇
明日は北西の風天氣次第によくなる

## 井上消防組頭を悼む

平　華生

〇君逝いて秋風頓に身ゝ沁みぬ
〇大木の倒れて暫しもの寂し
〇功成つて名も遂げて君安らかに
〇君逝けど數々の功に君生きぬ
〇消防の博士と君は讃へらる
〇平組日本に誇る君の功
〇消防に明け暮れ玆に五十年
〇君主唱公堂竣れど君は亡し
〇ありし日の活動振りや偲ばるる
〇莊嚴の辯堂々の指揮君顯如

## 安ちやん（六）

石森延男

一度そんないゝお點をもらつてしまふと、次のお清書がうんと惡いと、先生にあやしまれるにちがひないと、僕はお習字ばかりやりはじめた。父が書が好きで、日下部鳴鶴さんのお手本を澤山もつてゐて、それをかして下さつたのを幸ひ片端から摸書していきました。おかげでお習字が大好きになり、どうやらインチきもあらはれず、先生には叱られずにすんできました。この話は、今こゝで初めてざんげ（?）するわけなんで

安ちやんが僕をつれていつて　活動寫眞を見せてくれたことがあつた。いや活動寫眞ではなかつた幻燈でした。安ちやんは北星といふミツションスクールに通つてゐて、その夜は、學校の講堂でありました。あたりが暗くなると、ひだの多い正面の白布に圓形の幻燈が映る、エスさまがあの長い衣をひきずるやうにして、うつむきがげんに兩手をかろくひろげていらつしやる。そのまはりには小羊が群れて、あるものは首をあげてゐたり、あるものは、草をたべやうとしてゐたり、しばらくその繪がうつると、こんどはそれがすうつと右の方にずれていつて、そのかはりに左から違つた繪がさしこまれてくる。どこかでオルガンがひびいてゐたやうです。

『ね、どんなことがあつても

人をばかにしてはいけないよ。

ぼろ着物をきてゐても、ね

その人をあなどつてはいけないんですよ』

安ちやんから聞かされた言葉のうちで、はつきり耳にのこつてゐるのはこの言葉です。

## 講談　隱密小天狗（おんみつこてんぐ）　(130)

中川雨之氏作　近藤鐵氏畫

夢？

肉體こそ、病み衰へて居るが魂は、何處までもしつかりして居る彼。直に刀を引寄せると、柄を握つて片膝立てゝ、寄らば只一と打と身構へた。

すると、眞先に立つた一人が、のそり〳〵近づいて。

『おい戸田氏、驚くことは無い拙者だよ』

といつた。

なるほど、疑ひも無い忠彌の聲であつた、俊作はぎよつとした。物を言はうと思つたが急には口も利けなかつた。

すると忠彌の後から、なほぞろぞろと五六人這入つて來た。かと思ふと、俊作の枕もとは、もうその人々によつて取卷かれてしまつて居た。

『我々には、正雪先生の命に依り、今夜貴公を迎へに來たのだ、さあ出かけようではないか』

忠彌は、何處までも沈着を失つてゐなかつた、しかし、殺氣は次第に濃かになつて來た。

『折角だが、それは謝絶る』

俊作は、敢然として一蹴した。

『ふむ、すると貴公は、正雪先生の、迎へを受ける理由は無い、とでも言はれるか』

『さうだ』

『いや、その理由は、大いに有る、貴公は、夢を見て居るのではないか』

忠彌の態度は、大いに冷笑的に傾いて來た。

『夢。夢とは』

『密書の夢さ』

『えつ』

『我々一黨の計畫は、天下萬民を塗炭の苦しみから救ひ、そして明るく正しい政道下に置かうとする正義の戰ひだ、天は正しき者に與給ふ、その證據に、貴公から松平伊豆守に逆らうとした折角の密書は、氣の毒だが、一場の夢となつたのだ………』

忠彌の言葉の終らぬ中に進み出たのは惣五郎で、彼は手にせる密書を、見せびらかすやうにした。

『戸田さん、密書は爰に』

『やつ、きさま裏切つたなッ』

憤怒に燃ゆる俊作滿身の血！

『隱密といふことを知つてゐたら、あの時、おまへさんを助けるのぢやなかつた惡く思はねえでおくんなせえ。先生初め皆さんの大事には代へられませんからね』

俊作は忽ち、お蝶の安否が、氣がゝりになつて來た。

『妹は』

といつたきりで、惣五郎は口ごもつた、斬られて死んだとは、さすがに言へなかつたのだ。

すると俊作は、ます〳〵苛立つて。

『どうした、お蝶はどうした』

と重ねて詰つた。

『女奴、幕府の狗の手先を働いたから、天誅の刃に伏したのだ』

と、後の方で、一人の覆面が叫んだ。

『誰が斬つた』

咬みつくやうにしゆん作が叫んだ。

『拙者が斬つた』

忠彌が案外平然として云つた。

『なにッ』

忠彌を目蒐けて詰寄らうとしたが、しゆん作は突然後ろから、肩先を强く壓へつけられた。

一人の覆面が、何時の間にか、背後に廻つて居たのであつた。

が、いくら病衰ふても、さすがは柳生道場の小天狗と呼ばれた彼である。

『えッ』

と、體をひねると、はづみを喰つて、前へのめつて來た相手が、驚いて立ち直らうとする隙に、目にも溜らぬ早業。

しゆん作の手に、白刄が閃いたかと思つたら。

『わッ』

と叫んで、背後の男は引くり返つた。

廣告

おでん
たつた揚
やきとり
ソーダ水
一平（イッペイ）
電話二六三番

酒とマツイ
おでん 紫ちやん
平市田町花ノ里
電話三三三番

ダイナモ
バツテリー
マグネツト
礦山用エンヂン
久野電機
平市紺屋町五三
電話 七二一番
振替東京一五、一〇四番

上原家政婦會
平市紺屋町一二
會主産婆 上原通子
電話 二二番
産婆看護婦資格有者ニシテ最モ熟練ナル者ヲ一般家政婦トシテ派出致シマス

中古各種レール鐵管
礦山用機械器具類
製鐵原料問屋
二大製鐵會社特約店
海軍工廠御用達
銅鐵 機械 (KS) 井尻七三郎商店
福島縣平市鍛冶町十一
電話 五二二番
荷受場 平市鍛冶町 廿三番地
倉庫 平市鍛冶町 九 番地
御買上品精々御安く納品至ます
御拂下品は精々御高値に買受ます
十二封度レール、トロ車輪付屬附
鐵工工具品、新品着荷致しました

(高) 男女學生服……大特賣
高島屋の洋服
新柄背廣 レンコート
注文並ニ既製品
高島屋
平市二丁目
電話三八六番

磐城の御みやげ品
名物 靈峰羊羹（みやま）（名産柿煉）
姉妹品
磐城耶馬溪……美山羊羹（みやま）
同 七 濱……のり羊羹
同 豊 間……辨天羊羹
◎各種 一本 十錢
製造發賣元 小川郷驛前 平屋賣店

平市二丁目
あまと自動車商會
電話六四〇番

石綿ムシカマド
實用新案 第一八七四三〇號
意匠登錄 第六六一六七號
西山式
こんな經濟的な「かまど」は他にありません
安價な燃料で濟み、保温力が强く堅牢で火の元絶對安全！、御使用に御便利な！石綿製のムシカマド、近代生活のお台所に是非、おすゝめ致したい新製品で御座います。
和洋銅物 金物問屋
平市五丁目
(久) 釜屋商店

[illegible] 魚問屋
タ ヒ 甘鯛
エ ビ マナ鰹
白 魚 帆立貝柱
冷 カツノコ ウニ貝燒
電話二八番
配達ハ一尾一箱ヨリ迅速ニ致マス。

銘木（床ノ間材）
天井板、ベニヤ板買ふなら
確かに御期待に添ふ良品廉價の
一度お試せる勉强振りを、ぜひ一度お試を乞ふ
(万) 織田材木商店へ
福島縣平市
電話平四六〇番
營業種目……建築木材一式 銘木、ベニヤ板 秋田産杉四分板 建具材、便利瓦
◎小店員募集 年齡十五歲ヨリ廿歲迄

精神病科
腦脊髓病科
神經病科
内務省指定
福島縣立代用精神病院
郡山腦病院
郡山驛より約三十丁 安積中學より約五丁
郡山市外大槻村針生
電話九二五番
院長 醫學士 金森五郎
入院隨時

## 曲も「平の榮」を選び 市の前途を祝福す
### 公會堂竣功式餘興決定

生氣潑剌、さながら若鮎の如き新興タヒラの躍進向上を有形に象徴する超近代様式構成美の市公會堂は既報の如く爽秋快適の來月三日をトし、午前十時から竣功式を擧行、緊縮節約づくめな時局の波を乘り切り大祭を投じて建築を敢行した市公會堂は愈よ颯爽と世紀の脚光を浴びて市の南郊に一新風景をリリーフするのであるが當日の祝典は時局柄諸事簡素を旨とし祝宴の如きも現場に於て折詰め壜酒の程度に止むるらしく、餘興も銃後意識に拍車する意味に於て新田町美形總出の愛國行進曲を選び尚ほ其他も輕佻な種目を避け左記の通り決定したと

一、四季三葉草（淸元）　一、連獅子（長唄）　一、平の榮（新曲長唄）＝歌詞鶯亭金升、三絃杵屋十三郎、振付花柳德三郎、鳴物望月庄三郎

## 抽籤によらず詮衡
### 平局の特別電話近く決定

平局の十三年度特別電話架設の受理は既報の如く既に締切りを了し、仙遞工務出張所を通じて本局規畫課に報告された、而して昨十九日現在の申込總數は六百を若干越して居り、結局六百二十どまりと見られてゐる仙遞管內特別架設豫定數は二百二十五個大体申込數の三分の一を滿足せしめるに過ぎないことになる、平局の申し込み二十一口に對し果して之の割合で行くかどうか、他に比して申請率が極めて多い様なので樂觀出來ぬ様である、當局は申込者毎に國家總動員業務上の必要性に就き愼重審議を進めてゐるが、抽籤によらぬだけに早くも自薦運動が殺到して居り、二百二十五個の新設電話の配分は頗る注目を惹いてゐる

## 凶作地帶苗代 授賞式

凶作地帶の苗代改善と品種統制とを目的に催された磐三郡聯合苗代共進會の賞狀授與式は今二十日午後一時から相馬郡農會事務所で擧行された、郡下の入賞者左の如く賞金は一等十圓、二等五圓、三等一圓、賞郡農會長、青山技師、吉成、柴田兩技手が臨席した

△一等　蛭田貞藏（田人）折笠幸一（入遠野）△二等　綠川源三（田人）佐藤庄太（入遠野）酒井正親（同）柴崎喜治（永戸）小林軍太郎（同）高萩安吉（箕輪）草野發孝（澤渡）會田光貴（川前）吉田克己（同）△三等　油座始孝（田人）小野松治（同）平子平三郎（入遠野）平子春與（同）蛭田銳夫（同）荻野傳吉（永戸）津澤松惠（箕輪）小沼三男爾（同）大竹伊平治（三阪）根本一（川前）大河原精吉（同）根本庄吉（同）

## 海の雛鷲 鈴木君合格

海の荒鷲への希望に燃ゆる昭和十三年度後期甲種飛行豫科練習生の本縣合格者十君中地方關係者は四倉町鈴木千春君一人である

。。。。。牧野改良補助　郡下牧野改良組合に對する縣の改良補助額左の如く決定

△四百三十二圓上遠野村瀨谷子之吉△七百十圓荷路夫村蛭田源六△二百三十五圓磐崎村北郷三郎平△五百三十三圓永戸村合津一△九百八十四圓三阪村永久保倉藏△七百九十七圓川前村猪狩倉藏△五百三十三圓川前村白土辰衞

## 學校衞生視察研究會

左記日割で開かれることに決定

△小學校の部　十一月二十八日平第二校、同二十九日湯本入山校
△中學校の部　十一月三十日磐城中學（男部各中學校參集）

。。。。人絹チーム惜敗　縣健康保險課主催第六回被保險者軟式野球大會に出場した錦村昭和人絹チームは第一回戰で福島製作所を十二對五で一蹴したが會津方部代表廣田工場に二對一で惜敗

## 愈よ實施期が迫り 商店法を語る集ひ
### 廿七日市內各代表會同

世の多數大小店員を慈しむ同情的社會立法たる商店法の實施は愈よ十日の後に迫つたので市商工會では、之が支配を受くるに就て萬遺憾無きを期する爲、來る二十七日夜マルトモホール其他適當の場所に於て各營業組合代表其他關係者の會同を求め、經濟警察官及び市役所關係吏員等臨席の下に諸般の協議打合せを行ふ筈であると、尙は十時以後の營業を認むる所謂『閉店時刻の特殊區域』として商工會から縣に驛前の店舗を申請したに對し未だ厚生省から何等の指示を受けて居らぬが、由來同法の設けられた第一の理由は商店の營業時間は徒らに冗長無統制に流れ易く、使用人は顧客の有無に拘らず夜遲く迄就業せねばならず、ために自然睡眠不足となり過勞に陷り、健康を害すること多く晝間最も肝要な時に能率を發揮し得ないのを改善矯正するにあるとしてなるべく已むを得ないもの〻外は例外地域を設けぬが立法の精神にも叶ふと云ふ處から、爭うてその指定を强要する向が少く寧ろ力めて之を回避する傾向にある折柄前記平驛前の特殊區域問題はその向背如何に拘らず大局からさして關心を拂ふ程の事でないと觀られてゐる

## 陣中を聽く
(243)

## 前線へ歸り度いと 傷手を忘れて叫ぶ
### 市內南町出身 大森醫學士（通信）

——船が〇海〇〇海に出ると動搖を始めます。波の荒い時は棚のものが落下する事もあります。私も船に弱い方ですが看護婦諸姉も船暈に惱む人が澤山あります、頭がクラ〳〵して來ます。胸がムカ〳〵して參ります。食べた物を吐きます。ひどくなると血を吐く人もあります。看護婦諸姉は吐きながら戰傷者を看護して居ります。近頃は吐き方は上手になつて周圍の人々に不快の感じを與へぬ様に音を立てないで吐く様になりました。斯うして食事の世話から、重症患者には大小便の世話迄して呉れます。併し船が〇〇〇海に入ると鏡の上を滑る様で動搖がありません、それにそこは景色は繪に描いたよりも美しくて月夜などには何とも云はれません。

第一線に働く勇士諸君は如何に困苦欠乏に堪へてるかは想像以上です。白衣の勇士で（路）軍醫殿にだまされて後送されたのだ。前線に送つて呉れと云ひ張るのです。勇士諸君は國に殘した妻子の事を忘れて戰爭のこと許り考へてるのです。皆様も贅澤な事を考へては之等の勇士諸君に濟まぬ事だと存じます。

白衣の勇士を乘せた自動車が市內を通ると皆敬禮して呉れます、水道で洗濯してたおかみさんも洗濯をやめて敬禮して呉れました。五つか六つになる女小供が三人で腰をかゞめてました如何に子供と云ひ乍ら街の眞ん中で小用をしてるのかと不快に思ひましたが自動車が近寄つて見ましたらこの三人の女子供は七十歲位の老婆の如く腰を曲げて病院自動車に敬禮して居るのでした。こんな愛國少女が大きくなつて結婚されたら爆彈三勇士の樣な偉い人を生むのだらうと考へました

戰爭に勝つには身体が丈夫でなければなりません。獨り男子のみならず女諸姉も健康第一でなければならぬと思ひます、身体を丈夫にして君國の爲に御奉公されん事を希望致します。

〜◇〜

## 感謝に堪へず
### 多門未亡人から禮狀

一昨十八日滿洲事變記念日當日、市では青沼市長の名で當時の多門將軍房子未亡人に謝電を發したがこれに對し左の如き禮狀が届いた

拜啓本日滿洲事變第七周年記念日に當りては御懇篤なる御謝電を賜り感謝に堪へず謹みて御禮申上候　敬具

## 平市新投影（十）
### 給料日は嬉し
#### 待望の廿一日を前に 心は躍るベターハーフ

『讀みもしない全集なんて二つ宛も取つたりして、安ものの銘仙一反位何よう……』キリ〳〵と柳眉を逆立てたベターハーフなんである。そして今迄見て居た折り込みの廉賣廣告で忌々しそうにハナをかんで了つた丈けならば仔細はないが其のチラシがけば〳〵しい安物の石版刷だつたんである

０

憤慨に加熱されたハナ汁の爲めに融けた群青が、手荒く鼻の下を横毆りにした拍手に其のふくよかな頬には、無殘にも例へば近頃四倉の濱に立つて眺める様な一抹のホリゾンが淡と描かれたんである。其が稲荷さんの様に口尖をトンがらかして凝乎と貧乏搖るぎもせず一定の所謂目の高さの線を眺めて居るんだから流石の佛頂面の夫君としても尙ほ且つ轉げ廻つて爆笑せざるを得なかつたんである

０

爾來交情以前の如くならず、磐城址畔虫聲啁々たる夜、夙くも秋風落寞としてハシャがざる事夥しいんである。この調子では……と狂瀾を既倒に回らさずんばあるべからずの奮起一番したのが、根が中等學府を出て元來物わかりの良い夫君なんである。

０

提議するに發の日の銘仙購入斷行を以てしたんである！蓋し何事にまれ夫唱婦隨の舊道德を墨守して今日に至つた徹底したテロリストの夫君としては實に空前のことなんである。頰つぺたに群青色の水平線を描いた日以來、碌々物も云はなかつた險惡なその瓜核顏に遂然として一脈の春風が漂ひ出たのは勿論なんである

０

給も良し今宵こそ、あすに待望の俸給日を控ふる惠まれた二十日なんである。冷涼水の如き夜風に四つの袂を翻らせ乍ら――少し位の場合でも介意はない――喃々として六間門の坂を下る夫婦の姿を寫眞したアラその瞬間よ！ふたりの視線が期せずして鉢合せしたんである。ニッと白い齒を見せたんである。朗かな今二十日の晩方の家庭投影。

。。。。伊藤市助役　酒井課長と共に二十一日から三日間新潟市に開かれる全國市長會議に出席

。。。。木炭講習會　磐三郡木炭同業組合では十六、七の兩日川前村小學校で木炭講習會を開き十八日受講百五十名に對する證書授與式、並に座談會を開いた

## 九江で二勇士戰死

前田部隊上等兵上遠野村川原出身蛭田浩、同勿來町九面出身大友定一の兩君は此程前線で名譽の戰死をした旨原隊から發表された

○

蛭田上等兵は去る十三日九江附近戰鬪の華と散つた勇士、幸太郎さんの孫、出征前まで叔父に當る市內白銀町電機商藤浪時康さん方で電機器械の販賣をやつてゐた、妻女カク子さん（二六）との間に長男幹夫君（四）次男鐵夫ちゃん（一）がある

## 長橋青年 武運祈願

市內長橋町青年團では二十四、五の兩日大バスで茨城縣鹿島神宮から千葉縣香取神宮、成田山に出征軍人の武運を祈願、上京の上青年會館に一泊、陸相官邸等を歷訪、神社、佛閣に詣づる

## 酒肴無しデー

各方面商店公休　今二十日は制度のトップを切つた呉服太物商組合をはじめ酒屋、肴屋其他各方面商店の公休とあつて、お蔭で本來ならば酒肴無しデーの勵行を餘儀なくされる日。何々デーだの週間だのよりは遙かに効果的なけふも、實際は果してどんなものやら

。。。。伊藤飯野村長再選　飯野村長伊藤淺之助氏は二十六日任期滿了となるので村では十八日村會を開き再選決定

。。。毛布献納　前線勇士の防寒毛布は續々と市役所に寄託され市內田町大橋まささんも一枚寄託

## 古雜誌で獻金
### 磐城高女生の赤誠

磐城高女では去る六日より十日間を古雜誌献納週間とし全校生徒に呼びかけて取纏めた賣上金二十圓を恤兵金、八圓五十八錢を銃後々援會へ夫々正木校長の名を以て寄託した

## 巷の出來事

。。。詐欺　磐崎村上湯長谷長倉坑支柱夫吉田春治（三三）は今月上旬同僚横山一郎から同礦の物品請求書をあづかつたのを奇貨とし殘額五十四錢しかないものをなほ十一圓あるが如く變造、同礦物品販賣所泉屋こと田子福治方から現金九圓十五錢を騙取したこと發覺二十日平署に擧げられた

。。。只飮　內鄕村平太郎炭礦採炭夫田所元次郎（三九）は去る十七日座同村宮富士食堂で二圓五十錢分を只飮した上暴行を働き駐在巡査に抵抗平署へ

。。。銅線泥　內鄕村磐城炭礦運搬夫弓野孟勇（二七）高萩傳平（二二）の兩名は同僚二名を語らひ五月中町田坑倉庫からケーブル線三百匁を盜んだのを手始めに去月一日銅線二貫匁外四回に亘つて銅線類五十餘圓分を盜み何れも同村古物商某に賣却したこと發覺二十日平署へ

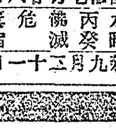
。。。屠殺調べ　市役所で此程十一、十二兩年度の屠殺數を調べた結果左の如く斷然豚が最高を示めてゐる

| | 十一年 | 十二年 |
|---|---|---|
| 牛 | 一一一 | 一三八 |
| 馬 | 四二〇 | 二六九 |
| 豚 | 二、三一一 | 二〇五五三 |

## 加藤直與翁

飯野村北白士八幡神社々掌加藤直與翁は永らく病氣療養中のところ一昨十八日午後五時逝去した、享年六十四、明二十一日午後二時から自宅で神式により告別式を執行する　翁は神職の傍ら永年に亘つて地方の育英に努め、さきに平市制一週年式には十五年以上勤續訓導として記念表彰を受けた

諸判定應需　東京市本鄕區湯島四丁目　高島易斷總本部　神誠館



閏舊七月廿八日　水曜　丙癸　佛滅　危　箕宿　新九月二十一日

▲一白　心の緩みをよく制し且つ交際にも注意すべし▲二黑　時折り不安に襲はるゝともたわまず勵むべし▲三碧　足もとに氣をつけつゝ進むが安全なるべし▲四綠　無理をすれば破れを生ず口入れごと尤も注意▲五黃　表面炎に惱はれ易し人の世話事は大凶なり▲六白　そろ〳〵良氣運に向ひ來るべし急ぐなかれ▲七赤　自取して進めば大吉横車を押せば失敗あり▲八白　平和を主とすれば諸事順調に運び行くべし▲九紫　一くわく千金を夢る時は屋根もはぎ去らるべし

二十一日（小名濱測候所發表）
滿潮　前　一、二〇　後　三、二〇
干潮　前　八、五五　後　九、一〇


平市南町
根本産婦人科
電 三四

味郷のサービスデー
本日よりおでん茶めしを初めました
毎月二十日はおひいき御禮としてお酒とビールをお勉め致します。
サッポロビール　一本卅八錢
白　菊　正　宗　一本十八錢
君　德　一本廿八錢
松　竹　梅　一本五十錢
◆お肴は燒鳥　トンカツ
平市三田小路（三丁目裏）
味郷（みさと）

平消防組頭井上茂作殿豫而病氣中の處藥石効なく昨十五日午前三時二十分逝去致され候に付消防葬を以て左記の通り告別式執行可致此段及御通知候
一、日時　九月二十一日午後一時
一、式場　平市第三小學校講堂
昭和十三年九月十六日
平消防組
葬儀委員長 副組頭　關內正一
平市長　青沼鉾太郎
平警察署長　本田勇治郎
消防顧問總代　櫛田榮太郎

父茂作儀永々病氣療養中の處藥石効無く本日午前三時二十分死去致候間生前の御厚誼を拜謝し此段謹告仕候
追而葬送の儀は消防葬を以て來る二十一日午後一時より平市第三小學校講堂に於て告別式執行の上市內大寶寺へ埋葬可仕候尙當日午前十一時迄は自宅に於て御弔問拜受可仕候取混中御通知洩れも可有之候本廣告を以て御通知に代へ申候間御容赦被下度候
昭和十三年九月十五日　福島縣平市五丁目
嗣子　井上良治郎
親戚總代　中野一衛
仝　中川良助
仝　中野惠次
友人總代　緒方惟一郎
青沼鉾太郎
安島重三郎
佐藤庄太郎
太村清治
星一
鈴木辰三郎
諸橋久太郎
三井榮一
柏原幸次郎